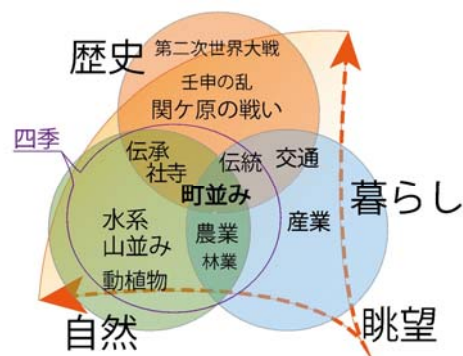


第1章 | 関ヶ原町の景観特性と課題

1 関ヶ原町の景観特性の概要

関ヶ原町の景観には、伊吹山をはじめとする山々や藤古川等の河川といった自然の景観、壬申の乱や関ヶ原の戦いに関わる歴史の景観、旧街道や農林業、交通、産業等に関わる人々の暮らしの景観があります。自然、歴史、暮らしはそれぞれが関わりあって景観を形成しており、景観の重なりは、さまざまな場所から眺望されます。

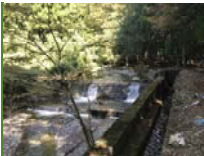
本計画では、関ヶ原町の景観を把握し、4項目15分類に類型化します。



【関ヶ原町の景観分類(4項目15分類)】

自然

伊吹山を最高峰とする伊吹山地や養老山地、鈴鹿山脈等の山並みや、藤古川、相川、今須川等の河川が起伏のある地形をつくっている。これらの豊かな自然を基盤としてさまざまな生態系と四季折々の美しい景観を形成している。

	①山並み	②水系	③動植物	④四季
分類				

歴史

壬申の乱や関ヶ原の戦い等の大きな戦の舞台であり、歴史上の出来事や人物を想起できる景観資源が数多く残っている。その他にも第二次世界大戦の遺構や、日本武尊をはじめとする多くの伝説や伝承が残されている。

	⑤壬申の乱	⑥関ヶ原の戦い	⑦第二次世界大戦	⑧伝承・社寺	⑨伝統
分類					

暮らし

旧中山道(旧東山道)等の旧街道が交差する交通の要衝であり、旧宿場町や旧街道集落地が趣きのある町並みを形成している。現代においても新幹線や鉄道、高速道路等の交通が集中し、関ヶ原町の暮らしと産業を支えている。郊外部においては、農林業が発達し、のどかな景観を形成している。

	⑩町並み	⑪農業	⑫林業	⑬交通	⑭産業
分類					

眺望

起伏のある地形を基盤として、自然、歴史、暮らしが感じられる多くの視点場が点在し、様々な場所から眺望される。

	⑮眺望
分類	

2 関ヶ原町の景観の成り立ち

景観は、山並みや河川等の自然や地形を基盤として、その上に古代から現代までの積み重ねられた歴史や暮らしが人々の目に映るものです。関ヶ原町の歴史からみた景観の成り立ちは次のとおりです。

<古代・中世>

- ・ 壬申の年（672）に壬申の乱がおこる。関の藤川（現在の藤古川）を挟んで激戦が繰り広げられたといわれ、戦いに勝利した大海人皇子は天武天皇となり、この地に「不破関」を置いた。
- ・ 不破関は、古代における軍事的要地であるとともに、奈良や京都を中心とする日本の中枢と東国の間の関門であった。現代でも関の東西では文化の違いがみられ、東の文化と西の文化を結ぶ景観が形成されている。
- ・ 京都と鎌倉をつなぐ東山道が関ヶ原町の東西を横断し、東山道から北へ迂回し近江に至る北国街道、伊勢に至る伊勢街道ができた。東山道には野上宿、山中宿がおかれ、人の暮らしや往来がみられた。
- ・ 旧街道は現代もその位置を継承しており、落ち着きのある建築物や植栽の緑が連続する旧街道らしい町並みを形成している。



<近世>

- ・ 慶長 5 年（1600）の天下分け目の関ヶ原の戦いでは、起伏に富んだ地形に東軍・西軍の陣が配置された。
- ・ 関ヶ原の戦い後、東山道を前身として中山道が整備され、伝馬制[※]が布かれた。
- ・ 中山道、北国街道、伊勢街道の分岐点に関ヶ原宿が整備され、交通の要衝となった。旅籠屋が 33 軒あった関ヶ原宿は、美濃 16 宿でも特に大きなにぎわいをみせた。また、今須村（現在の今須地区）は今須宿として整備され、妙応寺の門前町としてにぎわいをみせた。
- ・ 関ヶ原の戦いの陣跡の相互配置や地形は現代でも確認できる。また、旧中山道の位置や道幅は現代にまで継承され、旧街道らしい町並みを形成している。



※伝馬制: 荷物等を宿場ごとに人馬を交代して運ぶ制度

<近代(明治)>

- ・明治維新により宿駅制が廃止された。鉄道の整備は、明治22年(1889)に東海道鉄道が東京から神戸まで全通するまで、中間の各所で部分的に着工敷設された。関ヶ原町においては明治16年(1883)に長浜から旧北国街道沿いに東海道鉄道が開通し、同年、関ヶ原停車場が県下で初めて営業を開始した。
- ・関ヶ原町では地形的特徴から飲料水やかんがい用水に乏しく、江戸時代末期から始まったマンボ※)は、明治時代には最盛期を迎えた。
- ・宿駅制の廃止により、労働力の余剰は林業に振り分けられた。明治20年(1887)頃には、択伐林の技術が確立したと考えられている。
- ・現代においても、マンボは一部が使用され、今須択伐林は伝統産業として継承されており、関ヶ原町特有の農林業の景観を形成している。



※マンボ:地下を掘り、地下水を集めて導水する暗きよ。マンボの建設は江戸時代末から始まり、明治時代に最盛期を迎え、大正時代まで行われた。地下を通るものであるため、地上に現れる部分は少なく、町内の数ヶ所で通気口がみられる

<近代(大正～昭和戦前)>

- ・明治33年(1900)に長岡から柏原、今須を経て関ヶ原に至る新線(鉄道)が採用敷設された。これに輸送力を強化し、旧中山道に沿って東海道に合流する現東海道線ができた。
- ・積雪が多く急勾配である旧北国街道沿いの旧線は廃止され、廃線跡は後に国道365号となった。
- ・日清・日露戦争後、国内では軍事に力を入れていた。玉村(現在の玉地区)周辺では、人家が少ないこと、山に囲まれており取締まりが容易であること、本州中央に位置し、交通の便が良いことなどを理由に、大正5年(1916)に、玉の火薬庫が建設された。建設には多くの玉村の住民が従事した。



<昭和戦後～現代>

- ・昭和 29 年(1954)9 月に関ヶ原町と今須村、玉村、岩手村大高が合併し、現在の関ヶ原町が誕生した。
- ・旧中山道を踏襲する国道 21 号が市街地の中心部を通る。国道 21 号の道路混雑等を緩和する関ヶ原バイパスが平成 2 年(1990)に一部開通した。
- ・昭和 39 年(1964)に JR 東海道新幹線の開通および名神高速道路関ヶ原インターチェンジの完成、昭和 40 年(1965)に名神高速道路が全線開通するなど、現代でも関ヶ原町は東西交通の要衝として機能している。道路や鉄道沿いには、産業の発展に寄与する大規模な工場地ができ、JR 関ヶ原駅を中心として市街地は拡大した。人々の暮らしや町並みは近代化し、景観が大きく変化した。
- ・昭和 45 年(1970)には、揖斐関ヶ原養老国定公園が指定され、豊かな自然環境が保全されている。
- ・昭和 40 年(1965)に伊吹山ドライブウェイが全線開通、昭和 43 年(1968)に関ヶ原鍾乳洞等が観光地として整備された。また、古戦場関ヶ原フェスティバルが平成元年(1989)から始まり、その後関ヶ原合戦祭りとなり、関ヶ原古戦場を活用して大きな盛り上がりを見せている。
- ・令和 2 年(2020)10 月には岐阜関ヶ原古戦場記念館が完成し、更なるにぎわいの創出が期待されている。



<昭和 29 年(1954)の合併>



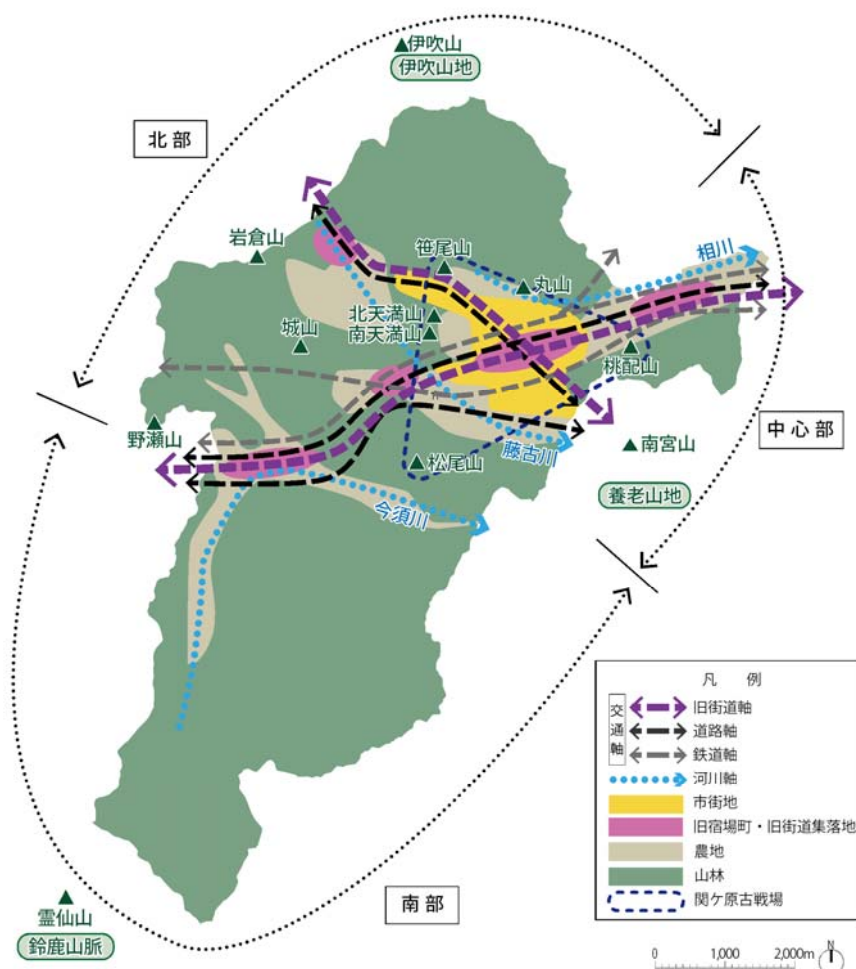
3 関ヶ原町の景観構造

関ヶ原町は、自然、地形からみると、北の伊吹山地と南の養老山地、鈴鹿山脈の狭間に位置し、藤古川、相川、今須川の河川により起伏に富んだ地形が形成され、山間に平地部を有する構造となっています。この地形上で十字に交差する主要な道路軸や鉄道軸等の交通軸は、古代から現代まで変わらずその位置を継承しています。

関ヶ原町の景観は、この交通軸から眺められることが多く、これらの交通軸は景観形成を図る上で重要な軸線となっています。旧街道軸の沿線には、旧宿場町、旧街道集落地があり、歴史的な趣きのある町並みが残ります。また、関ヶ原古戦場からの眺望は、旧街道軸による東西交通の交わりや、関ヶ原の戦いで東軍・西軍の陣が配置された起伏に富んだ地形を見て取ることができ、関ヶ原町の景観を代表する重要な景観となっています。

土地利用からみると、交通軸が交差する平地部に住宅地、商業地、業務地、工業地としての都市的土地利用の進んだ市街地が形成されており、その周囲には農地や山林が広がり、農林業が発達した自然豊かな景観が残ります。

また、関ヶ原町中心部には交通の要衝であったことによる市街地のにぎわいある景観、北部には伊吹山に向かう旧北国街道沿いの「玉の集落」に起伏のある地形と石積みのある町並み、南部では旧中山道の歴史的な町並みや今須杉などの林業と農業の景観がそれぞれ残るなど、地域によって特色ある様々な景観を有しています。それぞれの景観は、子どもたちがそだっていく環境や地域コミュニティを豊かにし、ふるさとの景観として継承されています。



関ヶ原町の景観構造図

4 関ヶ原町の景観特性

関ヶ原町の景観は、主に次の4つの特性により形成されています。

○ 関ヶ原古戦場の景観

関ヶ原町は、天下分け目の関ヶ原の戦いの舞台となった土地であり、「関ヶ原古戦場」は国指定史跡になっています。各陣跡からは、当時と変わらない地形とそこに配置された東軍・西軍の陣跡や旧街道との関わりを眺望できます。



決戦地

○ 東西を結ぶ交通の景観

関ヶ原町には、旧中山道をはじめとする旧街道、旧宿場町、旧街道集落地等、古くから続く人々の暮らしが感じられる町並みが残っています。また、旧中山道の東西では、東の文化と西の文化がそれぞれ継承され、文化の結節点となっています。現代では、旧街道の役割は、国道や鉄道に替わりながらも交通の結節点として機能し、今日までの人々の往来と暮らしを支えています。



旧中山道関ヶ原宿

○ 農林業の営みを感じる景観

関ヶ原町では、マンボやため池等、水不足対策に取り組んできた農業や、明治時代からの伝統産業である今須択伐林の林業が発達しています。農林業は人々の暮らしとともにあり、関ヶ原町の特有の景観を形成しています。



今須の農道

○ 心に残る関ヶ原町らしい眺め

関ヶ原町が有する景観は相互に関係しながら、暮らしの中で人々に眺められています。関ヶ原町の北部に位置する伊吹山は、暮らしの中に溶け込んでおり、住民に親しまれる眺めとなっています。

眺めは、季節や時間、祭りや伝統行事等のその時々によってさまざまな様相をみせています。



伊吹山の眺望

(1) 関ヶ原古戦場の景観

関ヶ原の戦いは数ある戦いの中でも日本有数の知名度を誇り、古戦場としての歴史的価値を有しています。当時から変わらない地形に陣跡相互の位置関係を眺望できる他、関ヶ原の戦いに関わる遺構等の多くの景観資源が残されています。

■ 地形・陣跡相互の眺望

関ヶ原の戦いでは、街道が集中し、山々に囲まれた狭い地形を活かして街道を監視できる位置に各々の陣が配置されました。例えば、北国街道は、笹尾山の西軍石田三成本隊が抑えの中心であったように、地形と街道を結び付けて布陣しました。

現代においても、各陣跡からは、関ヶ原町の地形や旧街道、他の陣跡の配置、位置関係をみることができます。



関ヶ原の戦いにおける東軍・西軍の陣跡



石田三成陣地(笹尾山)の眺望



小早川秀秋陣地(松尾山)の眺望

■ 遺構、保存顕彰に関わる景観

関ヶ原の戦いに関連する史跡は、国指定史跡である関ヶ原古戦場の他、町指定史跡として2箇所が指定されています。各史跡には、石碑や幟旗等が置かれ、来訪者に古戦場であることを示しています。

これらの遺構は、当時の歴史を理解するうえでの重要な資料であるとともに、地域の景観を形成する重要な景観資源です。



国・町指定史跡



決戦地(国指定史跡)
の石碑・旗



東首塚(国指定史跡)



徳川家康最後陣地(国指定史跡)
の土塁・松



岡山烽火場(国指定史跡)
の竹林



大谷吉隆墓(国指定史跡)

(2) 東西を結ぶ交通の景観

古代から人々の往来を支えた旧街道は、現代の日本の交通や産業を支える国道や鉄道に姿を変えています。旧中山道上では、関ヶ原町を境としてベンガラ塗の建築物がみられるなど、東と西の文化が継承されています。長い歴史のなかで変わらない役割を持ち続けた景観とともに、人々の暮らしが営まれています。

■ 東西を結ぶ景観

関ヶ原町付近を境にして、東西の文化の境界線となるということが言われています。文化は言葉や味覚など、直接目にすることができないものが多くあります。旧中山道の町並みを調べた今須中学校の生徒は、旧今須宿を“赤の宿場”、旧関ヶ原宿を“黒の宿場”と名付けたそうです。旧今須宿には、木部にベンガラを塗った建築物が多く残ります。一方、旧関ヶ原宿では、ベンガラが塗られていない建築物が多く、木材が経年により黒くみえます。建築物に使用する木材に色を付けること自体は珍しいものではなく、全国各地でみることができるため、ベンガラ塗を西の文化と直結することはできません。しかし、関ヶ原町を境として、西の滋賀県側にベンガラ塗が多く、東の旧中山道、美濃路ではほとんどみられません。現在みられる景観で、1つの町内でこのように変化するのは大変珍しいことです。

また、歌川広重が「木曾街道六十九次」に描いた旧関ヶ原宿や旧今須宿では、往来する人々の様子から、当時から交通の要衝であったことがうかがえます。



旧街道および宿場町、宿駅



歌川広重「五拾九 木曾海道六拾九次之内関ヶ原」※)



歌川広重「六拾 木曾海道六拾九次之内今須」※)

※転載元：国立国会図書館ウェブサイト

<関ヶ原宿の町並み(黒の宿場)>



関ヶ原宿(昭和初期)



関ヶ原宿(現代)



関ヶ原宿の町並み

<今須宿の町並み(赤の宿場)>



今須宿の町並み



今須宿の町並み



ベンガラ塗の建築物

旧関ヶ原宿、旧今須宿の他にも旧中山道には、旧街道らしい町並みの景観や景観資源が残されています。樹齢300年余りの旧中山道の松並木が残っており、地域により大切に保全されています。また、旧東山道であった頃におかれた不破関の周辺や、宿駅であった旧山中宿、旧野上宿では趣きのある建築物が連続する旧街道らしい町並みが残されています。

その他、旧北国街道や旧伊勢街道においても趣きのある建築物や石積のある町並みが残されています。

<旧街道、旧街道集落地の町並み>



松並木(旧中山道)



不破関(旧東山道)



旧山中宿(旧東山道)



旧野上宿(旧東山道)



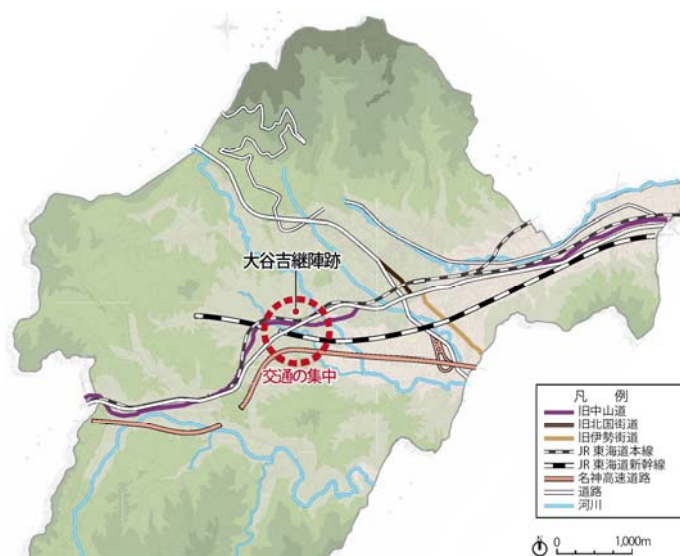
玉の集落(旧北国街道)



旧伊勢街道

■ 交通の集中する景観

旧中山道（旧東山道）と、旧北国街道、旧伊勢街道が交わる箇所や、旧街道沿いの旧宿場町や集落地等、古くから続く人々の暮らしが感じられる町並みが残ります。現在、これらの旧街道は国道 21 号や国道 365 号、JR 東海道本線となって人々の暮らしを支えています。さらに、日本の大動脈である JR 東海道新幹線や名神高速道路が通り、関ヶ原町だけでなく日本全国の生活を支える生命線となっています。



関ヶ原町の交通

交通が集中する関ヶ原町では、特徴的な交通の景観を各地でみることができます。その中でも大谷吉継陣跡は、旧中山道（旧東山道）、国道、JR 東海道本線、JR 東海道新幹線、名神高速道路の交通を眺望できる日本で唯一の場所です。また、景観を切り取るフレームのようにみえる高架や橋りょう等の構造物や、れんが積みで趣きのある構造物があり、個性的な交通の景観を形成しています。さらに、鉄道や新幹線が自然や町並みの中で走行する姿は多くの住民や来訪者に親しまれています。



交通の集中する眺望
(大谷吉継陣跡)



JR 東海道新幹線高架
と伊吹山



今須川と
名神高速道路の橋りょう



JR 東海道本線の
れんが積のトンネル(今須峠)



JR 東海道新幹線高架と
十九女池



旧山中宿を通る
JR 東海道本線の鉄道

■ 産業の景観

交通の発達、今日までの関ヶ原町の産業を支えています。国道や関ヶ原インターチェンジ周辺には、いくつもの大規模工場が立地しています。中には、敷地の一部を開放し、関ヶ原古戦場と一体的に景観を形成する大規模工場や、全長が 400m 以上にもおよぶ大規模工場等、それぞれの特徴を有しており、個性的な産業の景観を形成しています。



開戦地周辺からみる大規模工場



全長 400m 以上におよぶ大規模工場



大規模工場のある産業の景観

(3) 農林業の営みを感じる景観

関ヶ原町では、水田、畑地等の農地や山林、農林業に伴う施設が自然と相まって特有の景観を形成しています。

■ 水の景観

関ヶ原町には藤古川、相川、今須川とその支流が流れており、水に関わる景観は関ヶ原町の各所でみられます。河川は関ヶ原町の起伏に富んだ地形をつくり出しました。藤古川が形成した谷地形は壬申の乱の舞台となり、東西の境となる不破関が置かれました。玉の集落では藤古川によって大きく削り取られた地形となっています。この藤古川の上流部と相川等の北部の河川は、河岸段丘を形成し、通常は水の流れを感じることはできません。一方、今須川は流れが緩やかで、他の河川と比べて両岸から、水の流れを容易にみることが出来る親しみのある河川となっています。今須川が流れる関ヶ原町の南部は、扇状地となっており特有の景観を形成しています。また、梅雨の時期になると藤古川ではホタルがみられ、多くの住民に親しまれています。

この他にも、町内には湧水や鍾乳洞が存在しています。湧水は清水公園や玉倉部の清水があげられます。関ヶ原鍾乳洞はかつて海に生息した生き物の化石が残り、洞内の足元には水が流れており、これらも水にまつわる景観です。

田植えの時期には水田、冬には融雪溝に雪を流す景観等、四季折々の水の景観がみられます。



藤古川



梨木川(藤古川支流) と河岸段丘



清水公園



貝戸の融雪溝

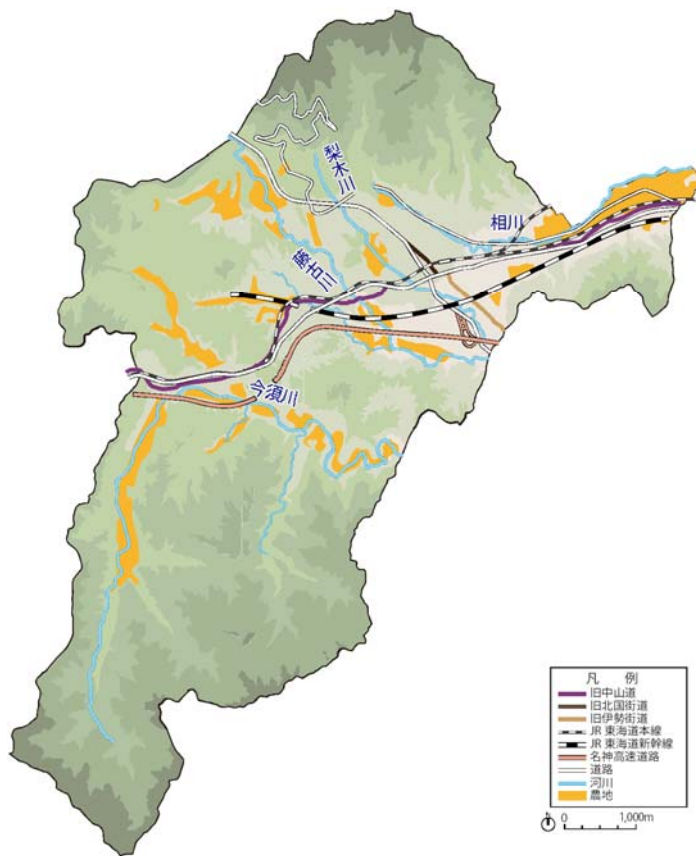
■ 農業の景観

相川が通る大高の地域や、今須川が通る今須の地域では、高低差が少なく、農道がまっすぐに伸びる見通しの良い農業の景観を形成しています。

一方、藤古川が通る玉の集落では、高低差のある河岸段丘の地形の上に、水田と集落のある農業の景観を形成しています。

また、地形的特徴から水不足となりやすい土地であることも、関ヶ原町の特徴であり、町内には水不足対策として、ため池や、マンボがつくられました。

数あるため池のうち、エコフィールド関ヶ原内の小栗毛池、八幡池にはバードウォッチングのための観察小屋があり、東海自然歩道とともに自然や四季を感じられる自然景観を形成する場所として町の農業で活用されています。



河川沿いに形成される農地

る自然景観を形成する場所としても親しまれています。マンボは、現在も流水し、関ヶ原町の農業で活用されています。



大高の農道と水田



玉の集落と水田



マンボ



八幡池と観察小屋

■ 林業の景観

今須択伐林は、明治時代から続く伝統産業であり、今須川流域の集落に近い里山に特に多くみられます。択伐と跡地への植樹、上層木の枝打ちを適時に行うことによって、異齢多層林の美しい山林の景観が保たれています。

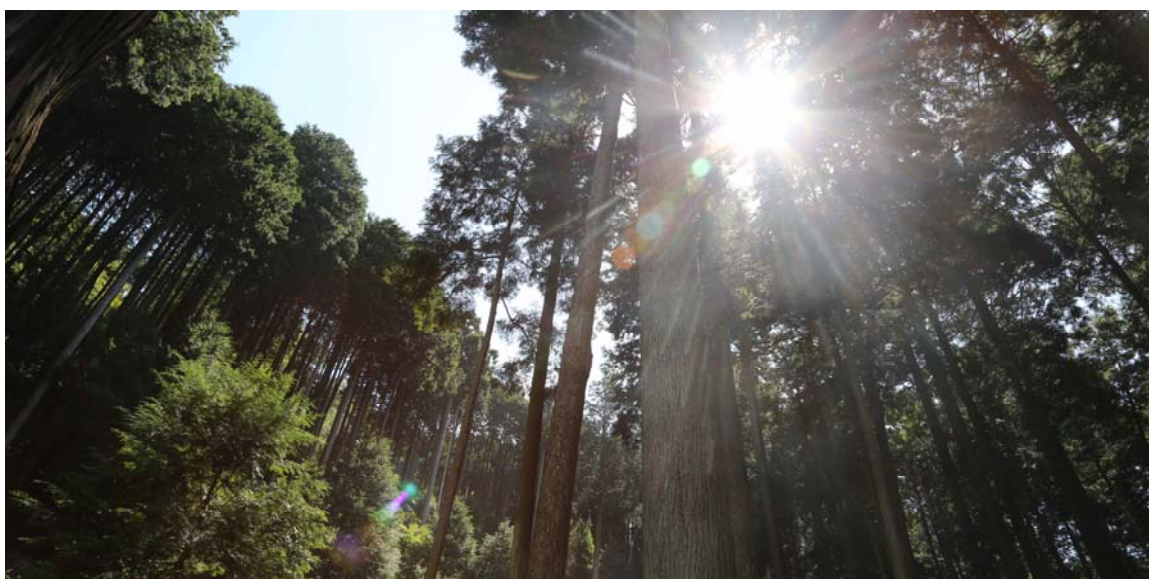
製材工場が最も集中するのは竹の尻と平井の集落で、多くの住民が暮らす地域です。伐採された今須杉等の木材が積まれる農道脇や、製材工場のある集落の町並み等、林業と深く関わる人々の暮らしの景観が形成されています。



農道脇に積まれる今須杉



製材工場のある集落



今須択伐林



今須択伐林と水田と農道

(4) 心に残る関ヶ原町らしい眺め

景観は、季節や時間、またはその時々 of 出来事によって様相を変えながら、暮らしの中に根付いています。暮らしの中にある眺めは、住民の心の中で地域のイメージをはぐくむものであり、関ヶ原町らしさを説明する上での重要な要素です。

■ 心の中に残る眺め

関ヶ原町は、夏には藤古川にホタルが飛び、冬には雪が積もり、四季折々の美しい眺めを有しています。「伊吹山が3回白くなると、まちに雪がふる」といった地元住民が日常的に使う言葉には、心の中に残る関ヶ原町らしい眺めを感じられるものがあります。

また、古くから関ヶ原町を訪れた文人が数多くいます。詠まれた和歌や俳句から、文人の感懐を招いた関ヶ原町の眺めを思い起こすことができます。

【言葉にみる心の中に残る眺め】

(晴れに関わる言葉)

- ・夜梟(ふくろう)が鳴くと翌日は天気になる、みみづくも天気
- ・鳶(とび)が空で舞うと翌日は天気
- ・夕焼けすれば翌日は天気

(雨に関わる言葉)

- ・伊吹山に向かって雲が流れると雨が降る
- ・伊吹山がはっきり見えないと雨が降る
- ・梅雨明けは雷が鳴ってから
- ・明神山に雲がかかれば雨が近い
- ・池田雷、音ばかり

(雪に関わる言葉)

- ・伊吹山が3回白くなると、まちに雪がふる
- ・冬、西の空に穴があくと、翌日雪が降る
- ・柿が豊作な年は雪が多い
- ・カメムシが多い年は雪が多い
- ・くもが巢を高い所につくると雪が多い
- ・ミノムシより高くに雪は降らない



雪の関ヶ原町(竹の尻)

【和歌・俳句にみる心の中に残る眺め】

(和歌)

- ・こきすてゝ 風はいふきの 山のはを さそひて出る 関のふち河(『内裏名所百首』藤原康光)
- ・ひとり行 旅ならなくに 秋の夜の ねものがたりも 忍ぶばかりに(『平安紀行』太田道灌)
- ・伝へきく 班女がねやの あふぎとて こゝぞ名所の 要なるべし
(『木曾街道続膝栗毛』十返舎一九)

(俳句)

- ・秋風や 藪も畑も 不破の関 (『野ざらし紀行』松尾芭蕉)
- ・陣場野や 草も夕も 松の花 (草稿 花村雪溪)
- ・鉄橋や 流れは細し 藤古川 (草稿 花村雪溪)

■ 伊吹山を望む眺め

関ヶ原町の北部に位置する伊吹山を視対象※¹⁾として、麓の玉の集落周辺その他、十九女池や貝戸周辺等、町内の至るところに視点場※²⁾があります。

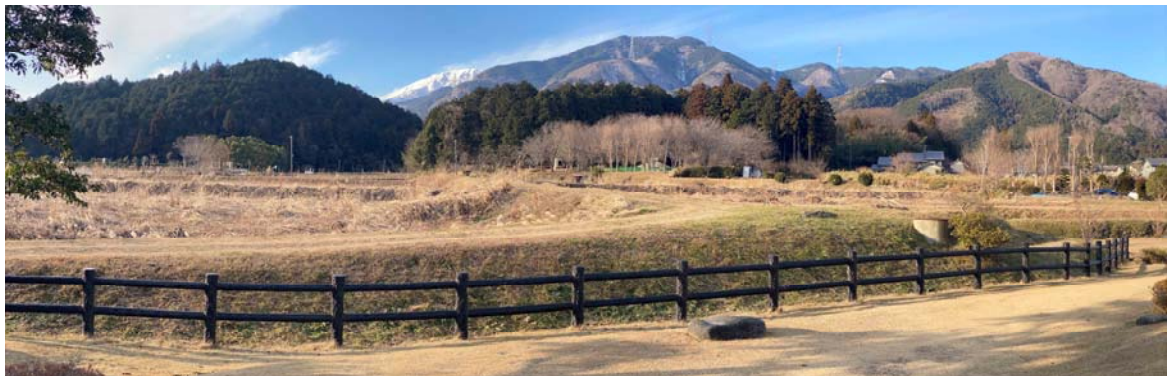
また、伊吹山は、日本武尊の伝説地としても親しまれている他、伊吹山ドライブウェイや登山道等も整備されており、観光地にもなっています。

※ 1 視点場：景観を眺める地点やその周辺のこと

※ 2 視対象：視点場から眺められる対象のこと



伊吹山への視点場の位置



開戦地周辺から見る伊吹山



貝戸周辺からみる伊吹山



戦国ロードからみる伊吹山



山中宿周辺からみる伊吹山

■ 祭り・伝統行事の眺め

関ヶ原町では、関ヶ原合戦祭り、秋葉神社に花火を奉納する秋葉山の火祭り、今須貝戸天満宮例祭（草角刀奉納）、若宮八幡神社例祭等の祭りが行われています。祭りの時期には、武者行列の眺めや、軒先に提灯がつりさげられる眺め、浴衣を着る人々が歩く眺めを、それぞれの祭りの時期にみることができます。

また、町内の各地で行われている地蔵盆や盆踊り、神社境内で行われる相撲大会やもちまき等の伝統行事がそれぞれの地域で継承されており、ふるさとの眺めを形成しています。



関ヶ原町で行われる祭り



関ヶ原合戦祭り※)



秋葉山の火祭り



若宮八幡神社例祭

※転載元：関ヶ原観光ガイド

関ヶ原町には、壬申の乱で敗北した大友皇子の御首が葬られたといわれている自害ヶ峯、源義朝の側室であった常盤御前の墓、日本武尊伝説の残る玉倉部の清水など、歴史的な出来事にまつわる伝説、伝承が残ります。また、美濃国と近江国の国境にあった寝物語の里、歯痛を治すといわれる六部地藏、ひとつの花に8本のめしべがつき、8個の実がなるといわれている聖蓮寺の八房梅など、地域の中で大切にされてきた伝説、伝承も多く残ります。

伊吹山 (日本武尊伝説)

玉倉部の清水 (日本武尊伝説)

腰掛岩 (日本武尊伝説)

黒血川

常盤御前の墓

寝物語の里

車返しの坂

兎掛石・省脱石

自害峰

八房梅 (聖蓮寺)

矢尻の井

龍女伝説

六部地藏

しゃもじ塚

班女伝説 (観音堂)

野上行宮跡

桃姫山

凡 例

- 旧中山道
- 旧北国街道
- 旧伊勢街道
- JR 東海道本線
- JR 東海道新幹線
- 名神高速道路
- 道路
- 河川
- 伝説地

0 1,000m

A photograph of a traditional Japanese garden. In the foreground, there are large, mossy rocks and a small stone torii gate. A wooden fence runs along the background, and various plants and trees are visible throughout the scene.

A photograph of a lush, mossy forest floor. Large, dark, moss-covered rocks are scattered across the scene. The ground is covered in a thick layer of green moss and small plants. In the background, there are large trees with thick trunks and dense foliage, creating a shaded environment. The overall scene is a dense, naturalistic setting.

-21-

5 景観に関する住民の意識

令和2年度（2020）に実施した「関ヶ原町の景観に関するアンケート」では、関ヶ原町の景観について住民の意向を把握しました。調査結果の概要は次のとおりです。

〔調査概要〕 調査日時 令和2年8月14日～9月4日

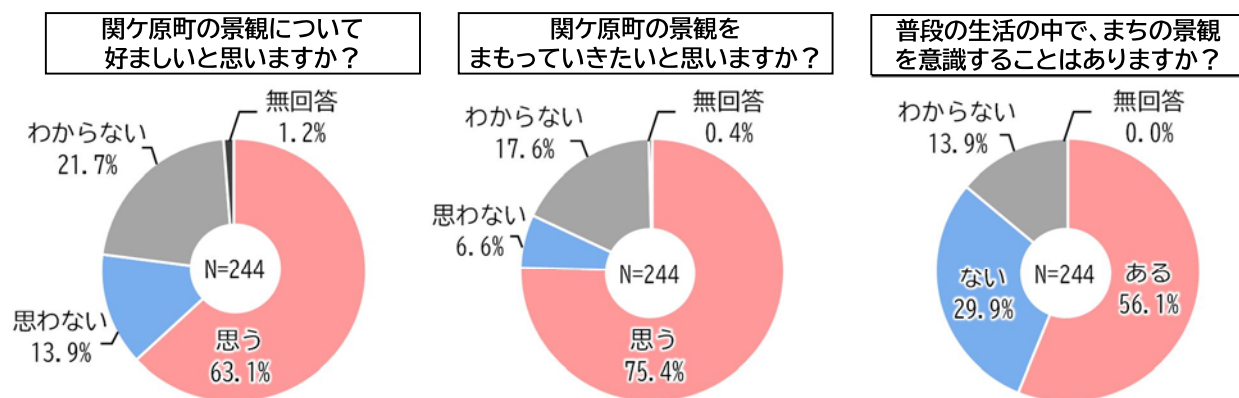
調査対象 関ヶ原町にお住まいの方（10歳以上の男女）

配布総数 600通

回収数 244通（回答率 40.6％）

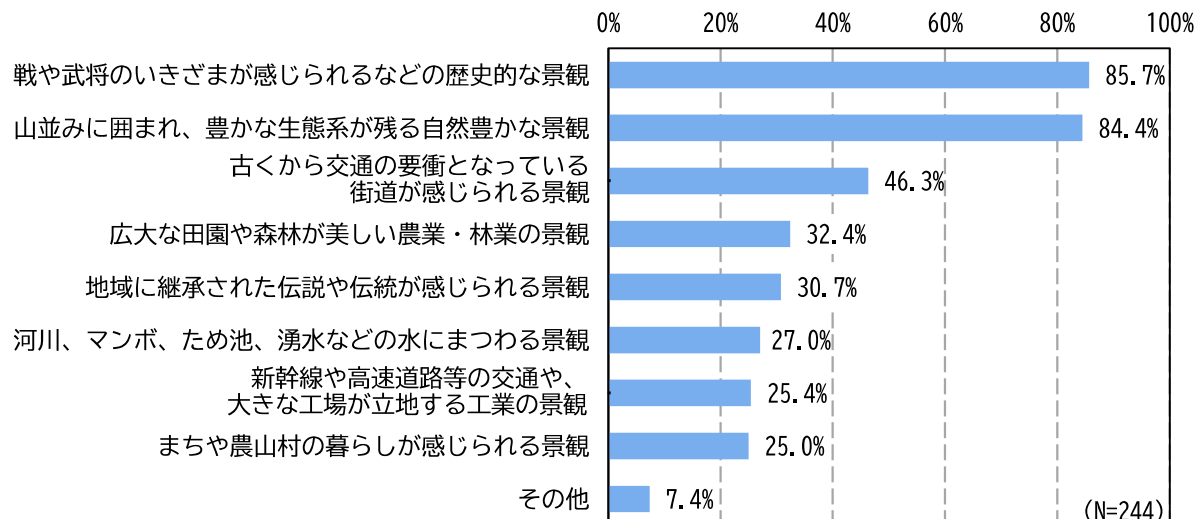
■関ヶ原町の景観の印象

関ヶ原町の景観が好ましいと「思う」割合は63.1％、関ヶ原町の景観をまもっていききたいと「思う」割合は75.4％です。また、普段の生活の中でまちの景観を意識することが「ある」割合は56.1％であるものの、「ない」割合は29.9％と3割に及びます。



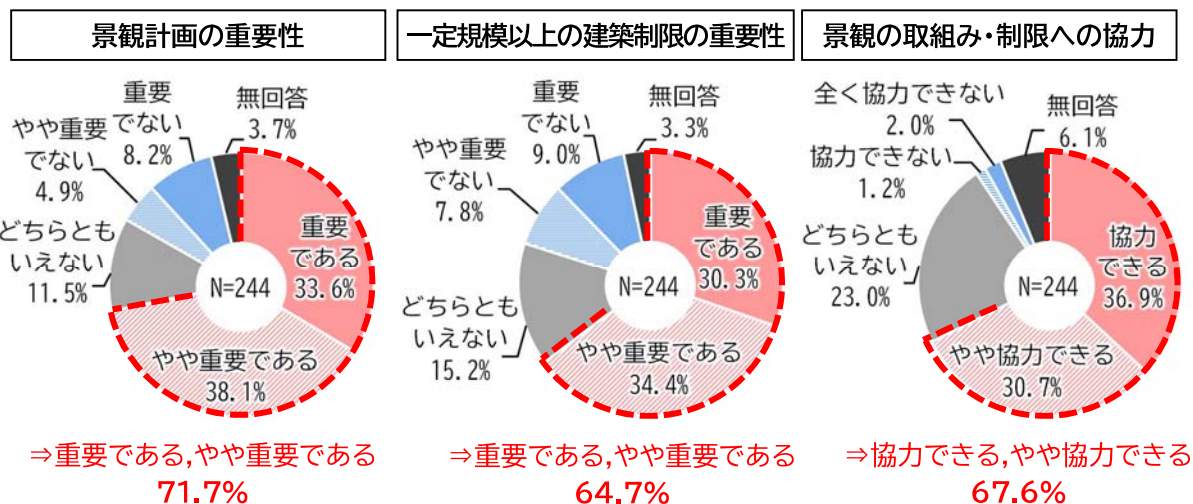
■関ヶ原町らしいと思う魅力的な景観

関ヶ原町らしいと思う魅力的な景観として、「戦や武将のいきざまが感じられるなどの歴史的な景観」が85.7％、「山並みに囲まれ、豊かな生態系が残る自然豊かな景観」が84.4％と8割以上であり、次いで「古くから交通の要衝となっている街道が感じられる景観」が46.3％と約半数を占めています。関ヶ原町が“古戦場のまち”や“街道のまち”であることや、山地に挟まれる地形から形成されている景観に魅力を感じている住民が多いことがうかがえます。



■行政施策に対する意向

行政施策として景観計画を策定することや、一定規模以上の建築制限を行うことについては、約7割の方が「重要である」または「やや重要である」と回答しています。また、景観の取組み・制限においても約7割の方が「協力できる」または「やや協力できる」と回答しています。



6 関ヶ原町の景観特性を踏まえた課題と取組みの方向性

(1) 関ヶ原町らしい景観形成に向けた課題

関ヶ原町の景観特性や住民の意向等を踏まえた、今後の景観形成に向けた重要課題は次のとおりです。

① 関ヶ原古戦場が有する景観的価値の明確化

関ヶ原町は、関ヶ原の戦いの舞台としての歴史を物語る景観資源を数多く有しており、それらを基軸とした「古戦場のまち」としてふさわしい整備を進めています。関ヶ原古戦場が有する景観的価値を再認識し、これにまつわる魅力的な景観資源を活かし、さらにその価値を高めながら次代に継承していくための景観の形成・保全が必要です。

また、関ヶ原古戦場からみた市街地は、現在は景観を大きく阻害する要因となる建築物等はありませんが、今後も眺望への更なる配慮や阻害要因の発生の抑制が求められます。

② 旧街道による東西文化を結ぶ景観形成

関ヶ原町は、古くから旧中山道（旧東山道）と旧北国街道、旧伊勢街道が交差する交通の要衝として、東西の文化を結び、さまざまな交流を通じて発展してきたまちであり、その過程で形成された景観資源を数多く有しています。また、近年では、新幹線、鉄道、高速道路等の交通が集中するまちとして、交通の景観の新たな価値の創出が求められています。これらの東西文化を結ぶ景観は、関ヶ原町の歴史の歩みそのものであり、今後も、その価値を次代に伝えていくため、東西の文化の違いを活かした町並みの形成の推進が必要です。

③ 暮らしの中から形成される文化的な景観の保全

関ヶ原町の市街地や農山村集落は、緑豊かな山々に囲まれ、背後の山並みや山林などが一体となった景観を形成しています。また、林業との密接な関わりの中で生み出される今須杉などの山林景観、長年にわたる人々と水との戦いから生まれたマンボやため池等のある田園景観は、住民の生活や文化の中からはぐくまれた関ヶ原町ならではの趣ある景観資源となっています。農業や林業の生業を通じて農山村の美しい田園景観、山林景観が保たれており、関ヶ原町の景観形成はこれらの生業が大きく関わっていることを認識し、生業に基づく自然や暮らしの景観を次代につないでいくことが必要です。

④ 心に残る関ヶ原町らしい眺めの保全

関ヶ原町には、関ヶ原古戦場をはじめとして歴史的、文化的価値の高い景観資源が数多く残されています。地形的な特徴や低層の市街地、広がりある農地等が、多くの視点場をつくり出し、人々の心の中で様々な歴史等を想起させる眺めを望むことができます。また、伊吹山等の眺めは、住民にとって、天候、気温などを予測するなど日々の暮らしに根ざした身近な景観となっています。人々の心の中に残り、大切にされてきた眺望景観の保全により生活を豊かにし、住民の関ヶ原町への誇りと愛着を育むことが必要です。

(2) 景観まちづくりの取組み課題

関ヶ原町における景観まちづくりの取組み課題は次のとおりです。

① めざすべき景観イメージの共有

景観まちづくりは、関ヶ原町に暮らす人々が、普段の見慣れた景観を“良い景観”として認識することから始まります。関ヶ原町らしい魅力ある景観が、どのような歴史や文化の中で形づくられたかを知ること、更なる魅力を発見することができます。関ヶ原町に暮らす誰もが、関ヶ原町の景観を身近に感じ、関心を持つことが大切であるため、景観に興味、関心を持つ住民や事業者の裾野を拡大していくことが必要です。

② 景観ルールの周知

「関ヶ原町の景観に関するアンケート」の結果のとおり、関ヶ原町の景観をまもっていきたいと思う人の割合は7割以上を占めています。そのためには一定規模以上の建築制限を重要とする回答の割合も高く、景観に対する住民の意識の高さがうかがえます。一定規模以上の建築制限等の景観ルールは、その必要性や内容に対する住民や事業者の理解と協力が前提となるため、事前協議等が行える丁寧な仕組みが必要です。

③ 公共施設のデザイン向上

公共施設は地域の重要な社会基盤であると同時に、その規模の大きさから地域の景観に与える影響も大きく、地域の景観まちづくりを推進していくための先導的な大きな役割を担っています。しかし、公共施設の建築物等が必ず景観に配慮していると言えないのが現状です。そのため、公共施設の整備の考え方を定め、国や県などの他の事業主体と協力して周辺景観やデザインに配慮した施設整備を進めることが必要です。